



手力雄神社

千葉県館山市大井字船田一二二九

社格：旧郷社 鳥居：両部鳥居

社紋：のほり藤 宮司：黒川邦保

氏子数：五十三戸 境内坪数：六百坪

祭神

御正座 天手力雄命

(あめのたちからおのみこと)

左座 天御中主命

(あめのみなかぬしのみこと)

右座 太田命(おおたのみこと)



形有本殿
指定の
千葉県
文化財

由緒

手力雄神社は神武元年、忌部族が鎮祭、養老二(七

一八)年、舎人親王により創建された古社と伝承されています。鎌倉、室町、戦国の時代を通じて、御祭神は武勇の神として崇拝され、各武将の間で信仰が厚く七〇貫文の社領を有し、里見時代、徳川時代には四十二石三斗の寄進を受け、その朱印状が現存しています。現在の社殿は天正十二(一五八四)年、里見義頼が造営。元禄十六(一七〇三)年の元禄大地震により破損。宝永六(一七〇九)年に修理・改修されたものです。本殿の建築様式は三間社流造、全体が朱塗りに施され、彫刻も極彩色、屋根は檜皮葺(もとは柿葺)など中世末の装飾法と江戸中期の特色が見られることから千葉県指定有形文化財になっています。拝殿に向かって左側に聳え立つ周四・五m、樹高三十七m、樹齢およそ七百年と推定される「大杉」は、館山市天然記念物に指定されています。手力雄神社の御神木として古来から氏子たちによって愛護されてきました。

来より氏子たちの並々ならぬ信仰心と地域への厚い想いが込められています。



長い歴史を感じさせる境内



御神木の「大杉」



風格ある両部鳥居

安房国司祭出祭

大井地区の人々にとって、やわたんまち安房国司祭(千葉県無形民俗文化財)への神輿出祭は最も大きな、そして特別な想いのある祭礼です。この神輿渡御は神社古文書などによると延久三年(一〇七二)頃より始まったとされ、およそ一千年にもわたりその伝統が連綿と現在まで引き継がれています。

安房国司祭出祭には、大井の人達全員が一丸となつてとりかかります。「夏なき」後の氏子総会から準備が始まり、総代打合

区(山車)が入祭します。山車が帰つた後の午後五時より安房神社神輿を皮切りに「還御」が始まります。滝の口神輿の還御の後、大井の神輿の鶴谷八幡宮境内での最後ののみさしに力が入ります。そして波が引くように神社をあとにし、大井への帰路につきます。

せ、出祭神社神職・総代会議、神輿団役員会議、団長会議などなど、細かな準備が続きます。そして迎える当日、未明に「御霊遷」、早朝に「発興祭」を執り行なった後、鶴谷八幡宮への「渡御」が始まります。白丁と紫の手甲を身につけた神輿団員にかつがれた神輿は、北条の街中を練り歩いた後、いよいよ鶴谷八幡宮へ入祭。長い参道を拝殿前まで一気に走り抜け、のみさしを練り返し、高々とさしながら「大井の神輿」の最も誇らしげな姿が観衆の目前で踊ります。特に湊地区の子安神社の神輿とののみさしの競演は勇壮で見応えがあります。

そして神輿が御仮屋へ納まると手力雄神社の神職による「着興祭」が執り行なわれた後、力綱が解かれ神輿屋根に龍の彫刻が飾られ、神輿団員たちは「宿(やど)」で疲れを癒します。翌日の早朝四時から「朝祈禱」が執り行われ、午後には北条地区の山車が入祭します。

山車が帰つた後の午後五時より安房神社神輿を皮切りに「還御」が始まります。滝の口神輿の還御の後、大井の神輿の鶴谷八幡宮境内での最後ののみさしに力が入ります。そして波が引くように神社をあとにし、大井への帰路につきます。



出発前、心踊る大井のみなさん



早朝の「発興祭」

主な祭典

一月三日

歳旦祭(新春祭典)

二月十七日

祈年祭(としごいの祭)

九月十四、十五日

安房国司祭出祭

十月九日

例大祭(秋季例大祭)

十一月二十二日

新嘗祭



鶴谷八幡宮境内で子安神社神輿との「のみさし」

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心にさまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。



手力雄神社に還御



御仮屋に納まり龍の彫刻が飾られる